

栄町五丹歩遺跡

—千葉県立房総のむらにおける江戸時代風景の再現事業埋蔵文化財調査報告書—



平成19年3月

千葉県教育委員会
財団法人 千葉県教育振興財団

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第576集として，千葉県教育委員会の「千葉県立房総のむらにおける江戸時代風景の再現事業」に伴って実施した栄町五丹歩遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，縄文時代早期後葉の土器を伴う炉穴が重複して検出されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 岡 野 孝 之

凡 例

- 1 本書は、「千葉県立房総のむらにおける江戸時代風景の再現事業」に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印旛郡栄町竜角寺1028-1ほかに所在する五丹歩遺跡（遺跡コード329-003）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県教育委員会の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査部長矢戸三男、北部調査事務所長古内茂の指導のもと、下記の期間・職員が実施した。

発掘調査	平成18年8月1日～8月21日	上席研究員	井上哲朗
整理作業	平成18年8月21日～8月31日	同上	
	平成18年12月1日～12月15日	同上	
	平成18年12月18日～12月28日	研究員	大内千年
- 5 本書の執筆・編集は上席研究員井上哲朗、研究員大内千年が担当した。
- 6 執筆は第1章・第2章第1節1・第3章・第4章第2節を井上が、第2章第1節2・第2章第2節・第4章第1節を大内が担当した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、栄町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「下総滑川」（N I - 54 - 19 - 9 - 4）
「成田」（N I - 54 - 19 - 10 - 3）
- 9 周辺航空写真は、京業測量株式会社による平成18年1月撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法と概要	1
第2節	遺跡の位置と環境	1
1	地理的環境	1
2	歴史的環境	1
第2章	縄文時代	7
第1節	遺構と出土遺物	7
1	遺構	7
2	遺物	9
第2節	遺構外出土遺物	12
第3章	古墳時代以降	13
第1節	遺構	13
第2節	遺物	13
第4章	まとめ	15
第1節	縄文時代	15
第2節	古墳時代以降	16

報告書抄録

挿図・表目次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡	3	第6図	縄文時代遺物 1	10
第2図	調査区の位置と周辺地形図	4	第7図	縄文時代遺物 2	11
第3図	調査区全体図	5	第8図	古墳時代以降遺構・遺物	14
第4図	各トレンチ土層堆積状況	6	第9図	周辺の貝塚と隣接地点出土土器	15
第5図	SK002・SK003・SK004	8	第1表	縄文土器観察表	12

図版目次

図版 1	五丹歩遺跡周辺航空写真	図版 4	SK002～004全景・遺物出土状況
図版 2	各トレンチ調査状況 1	図版 5	SD002・SD001
図版 3	各トレンチ調査状況 2	図版 6	出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

千葉県教育委員会は、平成18年度に「千葉県立房総のむらにおける江戸時代風景の再現事業」実施の中で、商家町並みの南側に堀割（水濑）を整備することを計画した。事業範囲内には周知の埋蔵文化財包蔵地である竜角寺古墳群・五丹歩遺跡などが所在しており、埋蔵文化財の取り扱いについて、記録保存の措置を講ずることとなった。発掘調査及び整理作業は、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

2 調査の方法と概要

調査に先立って業者委託による基準点測量に基づき、調査対象範囲1,214㎡内に4m四方を1グリッドとする南北84m（1～21）、東西72m（A～R）枠のメッシュを設定した（第3図）。

確認調査は、現在使用中の園路や、「和紙の店」で体験資料として使用するコウゾ・ミツマタ等の樹木を極力避ける形でトレンチを設定した。安全対策に配慮し、調査区に接する園路脇には安全柵を設けた。便宜上、調査区を北区・東区・南区に分け、それぞれ6か所・2か所・8か所のトレンチを設定した。当地区は昭和59年度の千葉県立房総のむら建設時に、竜角寺古墳群第83号古墳をはじめとした埋蔵文化財の保護のため、山砂による30cm～1mの盛土造成が行われていた（第4図）。この盛土は圧力を受けた硬質土で通常の調査よりも掘削深度が深くなることから、上層の掘削については重機を使用した。なお、この盛土に用いられた山砂は雨天時には崩落が著しい状況であった。

上層については、中・近世の溝部分は拡張せず、縄文時代炉穴を検出した地点を拡張し、確認調査350㎡（29%）で終了した。下層については、北区では埋没谷のためローム層が検出されず、東区・南区とした南部でのみ調査を実施した。遺物が出土しなかったため、20㎡（1.6%）の確認で終了した（第3図）。

検出遺構は、縄文時代炉穴4基・土坑1基、中・近世土坑1基・溝2条、出土遺物は、縄文時代早期土器・石器、古墳時代から奈良・平安時代土器・須恵器、中・近世土器である。

整理作業は、主に縄文時代遺物について大内千年が、その他を井上哲朗が分担して実施した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

北の利根川と南の伊藤沼水系に挟まれた標高32m程の台地上に位置する。この台地は北側から樹枝状に開析された小谷津が入り込み、南側は比高約20mの急斜面を呈する。調査区は北東から延びる小谷津の奥で、盛土造成されているが、標高は北部で32m、南部で34mと緩やかな傾斜がみられる（第1図）。

2 歴史的環境¹⁾

旧石器時代については、向台遺跡（第1図12）¹⁾・前原I遺跡（第1図16-I）⁴⁾等、当該期も調査対象とした成田安食線バイパス建設事業に伴う調査で遺物が出土した。

縄文時代早期については、調査区南側に近接する竜角寺遺跡第3地点（第2図4～6）で炉穴11基・土坑4基、第4地点（第2図7）で炉穴4基が、早期後葉の土器を伴って検出された²⁾。北側の池上りI・II遺跡（第1図15）では炉穴26基が早期中葉～後葉土器を伴って検出された⁴⁾。これまでの五丹歩遺跡（第1

図1)の調査でも早期後葉土器が出土している^{21) 20)}。周辺では、大畑I遺跡(第1図14)⁴¹⁾・竜角寺ニュータウンNo3地点(第1図17③)²¹⁾・上福田和田谷津遺跡(第1図23)²⁰⁾・上福田仲兵遺跡(第1図26)²⁰⁾・松崎遠原遺跡(第1図28)²⁰⁾などで遺物が出土している。また、中・後期は、竜角寺ニュータウンNo4地点(第1図17④)²¹⁾で中期末の集落が検出されている他、五丹歩遺跡(第1図1)^{21) 41)}・前原I遺跡(第1図16-I)⁴¹⁾・大畑I遺跡(第1図14)⁴¹⁾・松崎遠原遺跡(第1図28)²⁰⁾などで遺物が出土している。

弥生時代は当地域では密度が薄く、集落は酒直ニュータウン第1地点遺跡(第1図13①)²¹⁾で検出されている。後期土器片は五丹歩遺跡(第1図1)²¹⁾・前原I遺跡(第1図16-I)⁴¹⁾でも出土している。

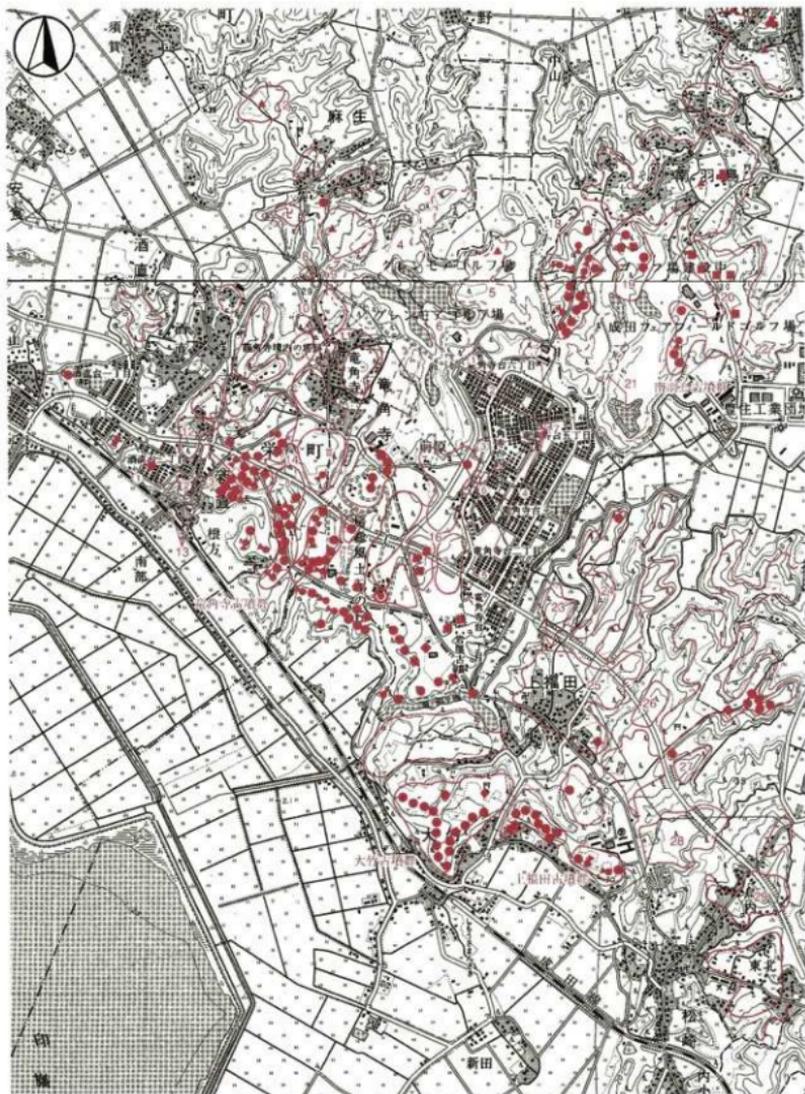
古墳時代では、五丹歩遺跡I区(第2図)⁴¹⁾・前原遺跡(第1図16)⁴¹⁾で5世紀の集落が検出されている。6世紀から7世紀には竜角寺古墳群(113基)が形成されて、岩屋古墳や浅間山古墳を最後に途絶える。7世紀後半には恐らく同一氏族によって北1.2kmに龍角寺が創建され、大畑遺跡(第1図14)^{41) 51) 41)}では同時期から8世紀の集落と掘立柱建物群が検出されたため、埴生郡衙推定地とされている。

奈良・平安時代では、五丹歩遺跡の成田安食線部分(第2図)⁴¹⁾、竜角寺ニュータウン遺跡(第1図17)²¹⁾、池上りII遺跡(第1図15,第2図)²¹⁾で火葬蔵骨器の点在が確認されている他、大崩遺跡(第2図1)²¹⁾で竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出されている。古墳時代から平安時代にかけては、墓城の周縁に居住城が形成された様相と言えよう。

中・近世では、龍角寺が中世前期に金沢称名寺と密接な関係を持ち学問所として隆盛し、江戸時代に焼失したが復興している。今回の調査区北側の塚群(第2図)は、中・近世の龍角寺との関係が推測される。なお、大崩遺跡(第2図1)²¹⁾と竜角寺遺跡第1地点(第2図2)²¹⁾で中・近世の室伏遺構や溝が検出されている。

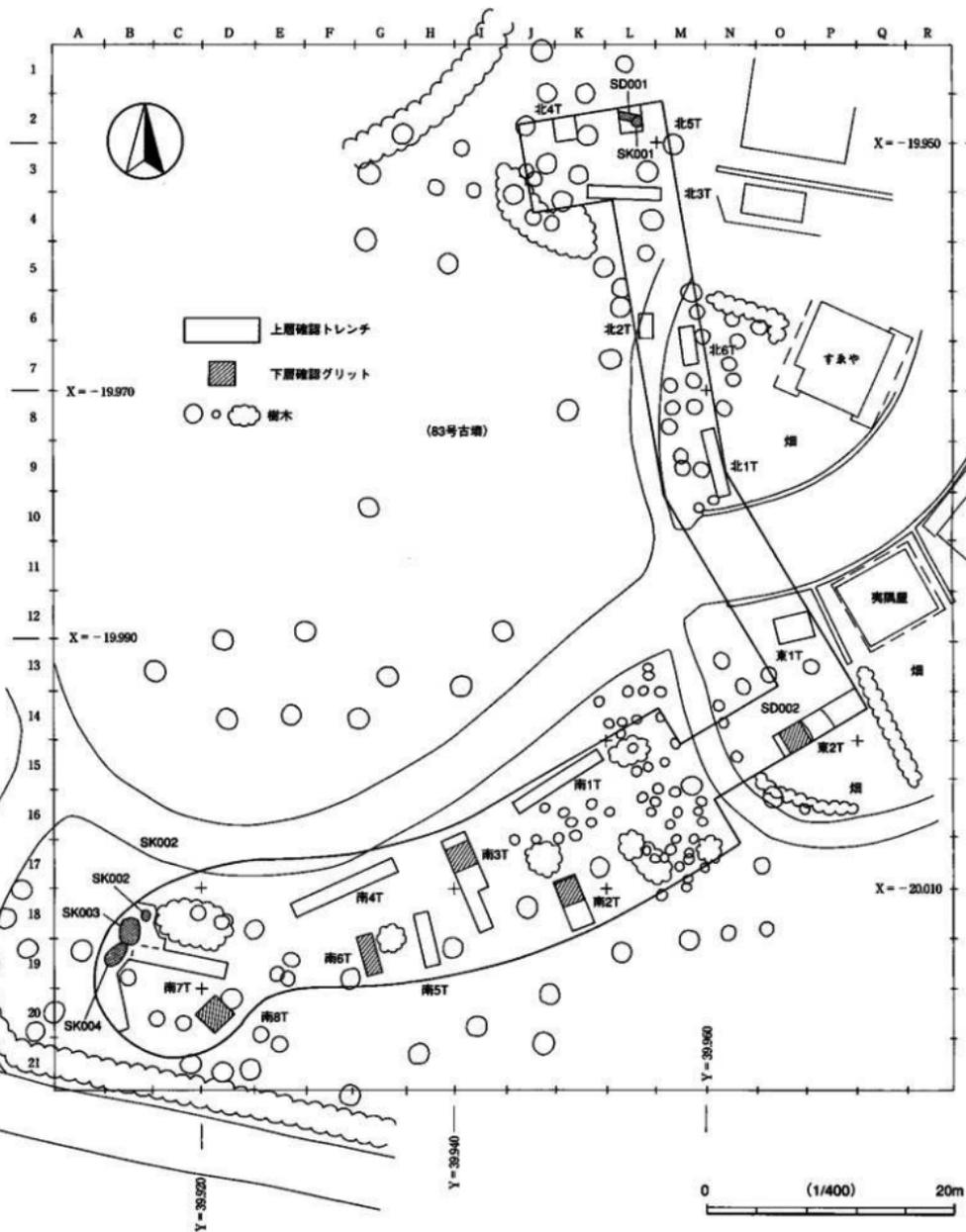
注1 刊行年代順に書名をあげ、掲載遺跡名がない場合は()内に記した。全体の記載に以下の文献を参考とした。

- 1 原田昌幸 1984 「千葉県立房総風土記の丘周辺の歴史的環境とその変貌」『千葉県立房総風土記の丘年報7』千葉県立房総風土記の丘
- 2 高崎博昭・矢戸三男 1981 「龍角寺古墳群確認調査報告書」千葉県教育委員会(五丹歩・池上り)
- 3 柿沼修平・越川敏夫ほか 1982 「龍角寺ニュータウン遺跡群」龍角寺ニュータウン遺跡調査会
- 4 石田広美ほか 1985 「主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地関連事業)地内埋蔵文化財調査報告書」(勸業県文化財センター(前原I・II, 五丹歩, 池上りI・II, 大畑I・II, 向台))
- 5 小林清隆 1985 「栄町大畑I-2遺跡-県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書-」(勸業県文化財センター)
- 6 大野康男 1986, 1987 「栄町埴生郡衙跡確認調査報告書」, 「同書II」千葉県教育委員会
- 7 根本 弘・折原 繁 1986 「大崩遺跡、竜角寺遺跡(第1, 2, 3, 4地点)」千葉県教育委員会
- 8 福岡 元ほか 1986 「酒直遺跡発掘調査報告書」酒直遺跡発掘調査会
- 9 森 尚登・上野純司 1989 「印旛郡栄町五丹歩遺跡-千葉県立房総のむら建設に伴う埋蔵文化財調査報告書-」千葉県教育委員会
- 10 永沼律朗 1993 「主要地方道成田安食線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書II」(勸業県文化財センター(上福田和田谷津, 上福田保町, 仲兵, 下福田稲荷原, 上福田13号墳, 松崎播磨, 烏内))
なお、本書の「松崎播磨遺跡」は松崎遠原遺跡に相当する。



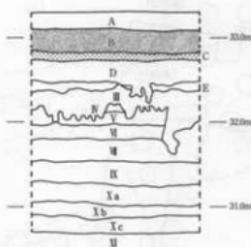
1. 五斗歩遺跡, 2. 竹ノ下貝塚, 3. 麻生谷田台遺跡, 4. 麻生天福遺跡, 5. 麻生広ノ台遺跡, 6. 谷田川遺跡, 7. 尾上遺跡, 8. 五斗尋遺跡,
9. 茶神遺跡, 10. 龍角寺瓦葺跡, 11. 龍角寺, 12. 向台遺跡, 13. 酒直ニュータウン遺跡, 14. 大畑遺跡, 15. 池上り遺跡, 16. 前原遺跡,
17. 龍角寺ニュータウン遺跡, 18. 南羽島高野遺跡, 19. 南羽島正福寺遺跡, 20. 南羽島殿道谷津堀遺跡, 21. 南羽島タダメキ遺跡,
22. 南羽島中嶋遺跡, 23. 上福田和田谷津遺跡, 24. 上福田保町遺跡, 25. 上福田遺跡群1, 26. 上福田仲兵遺跡, 27. 上福田張則遺跡,
28. 松崎遠原遺跡, 29. 松崎島内遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/2500)



第3図 調査区全体図

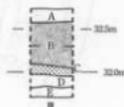
南区3トレンチ東側壁



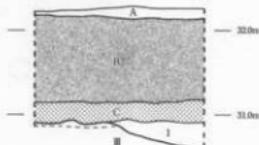
基本層序

- A 暗褐色土層 現表土層。畑耕作土の場所もあり。
- B' 明褐色砂質土層 A・B層の混合層。
- B 明褐色砂質層 盛土造成層。
- C 黒褐色土層 径2~3mmのローム粒少量含む。造成前表土層。畑耕作土の場所もあり。
- D 暗褐色土層 黒褐色土層中にローム微粒やや多く含む。
- E 明褐色土層 ローム微粒中に黒色土粒少量含む。
- F 黄褐色土層 ソフトローム層。(以下X層まで立川ローム層)
- G 明褐色土層 赤色スコリア少量含む。
- H 黄褐色土層 IV層との差不明確。第1黒色帯。
- I 明褐色土層 火山ガラス粒(AT)を含むやや白色の層。
- J 褐色土層 第2黒色帯上部
- K 暗褐色土層 第2黒色帯下部
- Xa 黄褐色土層 赤色・黒色スコリア少量含む。
- Xb 暗黄褐色土層 Xa, Xc層に較べやや暗い。
- Xc 黄褐色土層 スコリアを含まない。
- XI 灰黄褐色粘土質土層 (武蔵野ローム層上部)

北区1トレンチ
南側壁一部

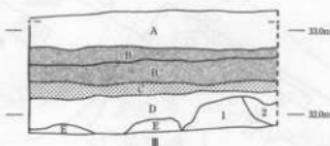


北区3トレンチ南側壁一部



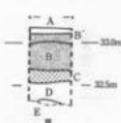
- I 暗褐色土層 黒褐色土中にローム微粒少量含む。盛土造成の圧力のためかまじりややあり。根掘り起こし後の自然埋没か。

東区1トレンチ東側壁一部



- B' 明褐色砂質土層 (畑耕作土A層と盛土J層の混合層)
- 1 明褐色土層 ローム微粒中に黒色土粒少量含む。(E層とF層の混合層か)
- 2 明褐色土層 D層より若干ローム粒多くやや明るい。(東区2トレンチ出土溝の関係か)

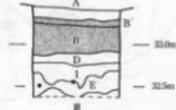
南区トレンチ南東壁一部



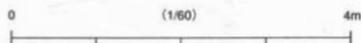
南区5トレンチ南側壁



南区6トレンチ南側壁



- 1 黒褐色土層 黒色土中にロームの微粒-径5mmのブロック少量含む。(1層下部~E層から条痕文土器片出土。)



第4図 各トレンチ土層堆積状況

第2章 縄文時代

調査区の北部から南区1～3トレンチでは、表土(A)、30cm～1mの盛土砂層(B)の下に、房総のむら造成時の表土・畑耕作土(C)が10cm～20cmが存在する。更に南西部の南区5～8トレンチではC層は明確に検出されず、旧表土と考えられる黒褐色土層(1)が認められた。同層下部から明褐色土層(E)にかけて条痕文系土器の破片が散漫に出土した(第4図)。

第1節 遺構と出土遺物(第5～7図)

1 遺構(第5図)

調査範囲の南西端に設定した南区7トレンチ端のE層下部において焼土を確認した。周囲を拡張したところ、3か所の落込みを確認し、SK002からSK004とした。

SK002

長軸80cm・短軸60cm・深さ20cmの掘り込みをもつ土坑である。底面東側に径20cm程・深さ10cmのピットが検出された。覆土は焼土粒を含む黒色土層からなるが、火床部は検出されなかった。早期後葉・条痕文系土器1点出土したが、小片のため図化しなかった。炉穴SK003に関連する土坑と推測される。

SK003・SK004

切り合いのある炉穴群で、SK003は長軸2m・短軸1.8m・深さ30cmの不整形円形、SK004は長軸2.55m・短軸1.06m・深さ60cmの長楕円形である。複数の火床部・土層堆積状況・土器の出土状況等からSK004には3基の炉穴が重複し、SK003も含めて計4基の炉穴が復元できた。时期的に差が少ない同種の遺構の切り合いのため土層が類似しているが、以下、推測される形成順に記述する。

(火床部1炉穴) SK004の中央部に火床部を持つ炉穴である。焼土が確認された火床部は径40cm～46cmで焼土下のローム面は被熱硬化が見られた。推定規模は、形状と土層堆積状況等から火床部を南端に有し北側に空間を持つ長軸1.8mである。

(火床部2炉穴) SK004の南端部に火床部を持つ炉穴である。土器は第6図1の上に第6図2が重なって、つぶれた状態で出土した。火床部は南端部に径30cm～40cmの範囲で焼土が見られ、その脇の壁面は被熱硬化していた。推定される規模は長軸約2mである。

(火床部3炉穴) SK003である。東側の一部でやや突出する形状であるが、基本形は床面に見られる楕円形と推測され、短軸は1.6m程とするべきであろう。SK004のSK003側に壁崩落層と推測される13層が認められることから、火床部1炉穴が埋没した後の形成であろうが、覆土上層(7層)とSK004の2・3・10層は類似していることから、SK004の火床部2炉穴・火床部4炉穴との新旧関係は不明である。ただ、SK004の切り合いのない炉穴とも近接しており、同時存在の可能性は低いと推測する。

(火床部4炉穴) SK004の火床部2炉穴が埋没した後に、覆土中に掘られた炉穴である。SK004覆土中層から長軸70cm・短軸30cmの範囲で焼土が堆積し、東側壁の一部が被熱硬化していた。焼土中から土器片(第6図3)が重なる様に出土した。推定規模は長軸2mである。

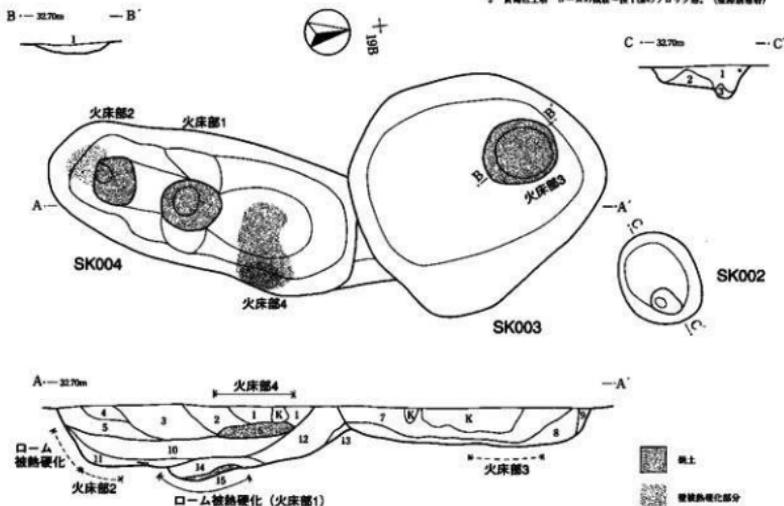
以上、この地区では、短軸1m・長軸1.8m～2mの長楕円形炉穴3基(SK004)と短軸1.6m・長軸2mの炉穴1基(SK003)が重複し、これに関連する土坑1基(SK002)が形成されたと推測される。

SK003・火床部3

- 1 暗褐色土層 暗土層中に暗色土粒少量含む。
 直下はハードロームの残骸した赤褐色土層。

SK002

- 1 暗褐色土層 黒色土粒とローム層中に暗土粒少量含む。
 2 暗褐色土層 ローム層中に黒色土粒・暗土粒少量含む。
 3 黄褐色土層 ロームの残骸・径1cmのブロッサム。(壁跡部を除く)



(SK004・火床部4切欠)

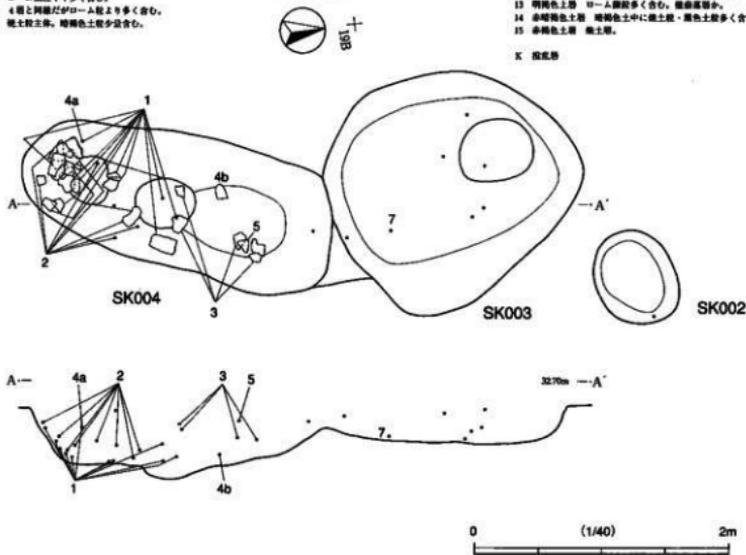
- 1 赤褐色土層 暗褐色土中に粘土凝結多く含む。しまり中であり、以下同様。
 2 暗褐色土層 暗土層中多く含む。
 3 暗褐色土層 暗土粒少量含む。
 4 暗褐色土層 ローム層中に多く含む。
 5 暗褐色土層 4層と同様だがローム粒より多く含む。
 6 赤褐色土層 暗土粒主層。暗褐色土粒少量含む。

(SK003・火床部2切欠)

- 7 暗褐色土層 黒土層に、ローム凝結少量含む。
 2・3層と同様だが中々暗い。
 8 暗褐色土層 ローム層中に多く含む。
 9 暗褐色土層 ローム層中に暗褐色土粒少量含む。壁の遺存部所少。

(SK004・火床部1切欠)

- 10 暗褐色土層 ローム凝結少量含む。
 11 暗褐色土層 3層と同様だが、暗土層中多く含む。
 (SK004・火床部1切欠)
 12 暗褐色土層 11層と同様だが、暗土層は中々少量。
 13 暗褐色土層 ローム凝結多く含む。壁跡部所少。
 14 赤褐色土層 暗褐色土中に黒土粒・暗色土粒多く含む。
 15 赤褐色土層 黒土層。
 K 壁残跡



第5図 SK002・SK003・SK004

2 遺物 (第6・7図)

第6図1～3・第7図4～6がSK004, 第7図7がSK003から出土した土器である。いずれも胎土中に繊維を含む早期後葉・条痕文系土器である。土器の記載について、胎土・焼成などの基礎的な観察項目については第1表にまとめた。土器断面図の図化に際しては、土器の断面を中心に置き、外面の拓本を左に、内面の拓本を右に置いた。土器断面図への網掛け等は敢えておこなわなかった。

1・2はSK004・火床部2炉穴に伴うと考えうる土器である。前述のように、2が1の上に重なるようにして出土した。第5図下の出土状況を示した図では、微細図部分について個体の対応ができず接合線が結ばれていないが、概ね1が火床部2炉穴の底面付近でまとまって出土していることが判る。

1は若干外反気味に口縁部が開く深鉢である。底部付近を欠くため底部形状は不明である。上方から見た口縁部の形状は、早期後葉に特有の菱形に近いいわゆるラグビーボール状を呈する。比較的薄手・堅緻な焼成で、内外面とも深い条痕が明瞭に残る。文様は口縁からやや下がった位置に1条の横位沈線を巡らせ、狭い口縁部文様帯を画する。この口縁部文様帯内に、おそらく半截竹管の外側を用いて下方から括るようにして施した短い縦位・斜位沈線を連続させる。口唇部にもおそらく同じ工具によるキザミを施す。このキザミは比較的深く施され、口唇部は小波状が連続するように見える。文様としては典型例とは言い難いものの、狭い口縁部文様帯のあり方や、焼成の特徴から見て、広義の茅山式の中でも野鳥式の範疇で捉えるのが妥当であろう。

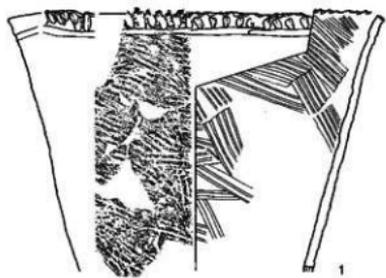
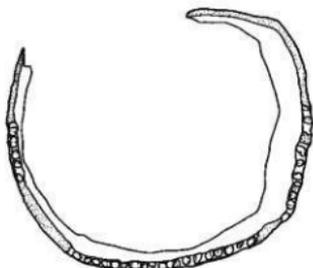
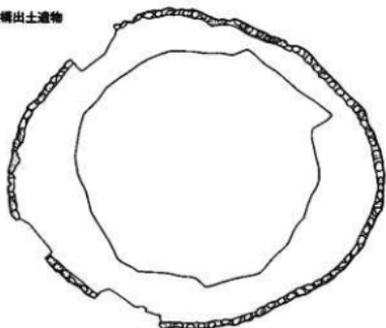
2は口縁部が直線乃至やや内湾ぎみに立ち上がる深鉢で、やはり底部を欠く。上方から見た口縁部の形状は、方形に近い。内外面とも条痕が明瞭に残る。口唇部には1と同様の深いキザミを施し、やはり小波状が連続するように見える。

3はSK004・火床部4炉穴の焼土中で出土した。大形の破片で、底部を欠く深鉢である。図上で径を推定復元したが、1・2同様上方から見た口縁部の形状がかなりゆがんでおり、復元した口径はそれほど正確ではなかろう。口縁部に向かって直線的に立ち上がる器形で、図では体部下方に若干段があるように見えるが、実際にはそれほど明瞭な段ではなく部分的なゆがみかもしれない。薄手・堅緻な焼成で、内外面とも深い条痕が明瞭に残る。条痕は外面が縦位方向、内面が斜位に施される。口唇部には浅いキザミが施される。口縁部には3本一組の沈線による、雑な幾何学状の文様が描かれる。文様部分の残存が悪く判然としないが、鋸歯状の意匠間に、部分的に短い沈線を充填しているように見える。こうした意匠文は1と同じ野鳥式の中に見られるもので、この土器も野鳥式の範疇で理解してよいと思う。

4a・4bは同一個体片と判断したものである。出土位置はやや離れており、4aがSK004・火床部4炉穴の覆土中、4bがSK004・火床部2炉穴の底面付近から出土した。本来SK004・火床部2に伴うものが、SK004・火床部4炉穴が構築された際に攪乱され、覆土中に混入したものであろう。内外面に深い条痕を明瞭に残す土器で、特に4bの内面には炭化物が顕著に付着する。

5は出土位置から見てSK004・火床部4炉穴の覆土中で出土したと考えうる。内外面に縦位方向の明瞭な条痕を残す土器である。6はSK004の覆土中一括遺物として取り上げられた土器である。内外面に深い条痕を残す、薄手、堅緻な土器である。7はSK003の覆土下層出土土器である。浅い縦位方向の条痕が内外面に残る。内面には炭化物が付着する。

遺構出土遺物



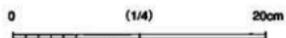
(SK004・火床部2 炉穴)



(SK004・火床部2 炉穴)



(SK004・火床部4 炉穴)



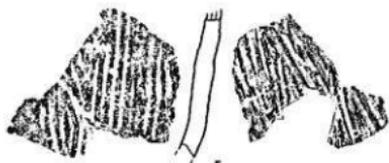
第6図 縄文時代遺物1

遺構出土遺物

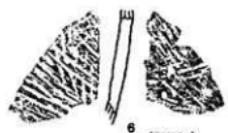


4a
(SK004 - 火床部 2 伊穴)

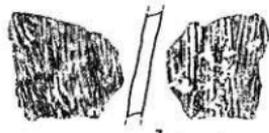
4b



5
(SK004 - 火床部 4 伊穴)



6 (SK004)



7 (SK003)

0 (1/3) 10cm



遺構外出土遺物



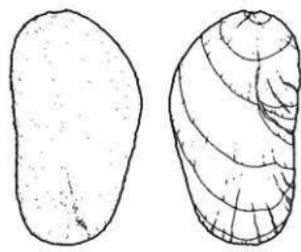
8



9



10



11

0 (1/3) 10cm

0 (1/2) 5cm

第 7 図 縄文時代遺物 2

第2節 遺構外出土遺物（第7図）

8・9は南区7トレンチで出土した土器である。このトレンチではSK003・004炉穴群が検出されており、この遺構との関連が窺える早期後葉の土器である。8は小突起を持つか、あるいは小波状を呈する口縁部破片である。内面には横方向の条痕が残る。外面に条痕は観察できない。口縁部に断面三角形のやや太い隆線を縦位に、やや間隔を空けつつ連続して貼り付ける。縦位隆線の間隔は一定しないようである。文様から見て早期後葉・野島式と判断できる。9は口唇部に弱いキザミをもつ土器で、内外面に条痕を残すものである。

10は東区2トレンチで出土した早期後葉の条痕文系土器である。口唇部に明瞭なキザミをもつ口縁部破片で、内外面に条痕を残す。補修孔の一部が残存する。

11は南区7トレンチ出土の石器である。SK003・004炉穴群付近の遺構確認面からの出土であった。石材から見ると旧石器時代の所産である可能性がある。出土状況から一応縄文時代以前の石器としておく。「黒色緻密質安山岩」「ガラス質黒色安山岩」など呼称される、硬質の安山岩製の剥片である。扁平な円礫の一部を割取ったもので、表面は全体が自然面で、円礫の形状を良く残す。色調は風化により、自然面・剥離面ともオリープ黄色に近い。当財団で通常用いる計測方法による計測値で、長さ9.02cm、幅5.00cm、厚さ3.18cmである。重量は144.12gである。

第1表 縄文土器観察表

図	No	出土位置	時期・型式名等	注記	部位	検成	色調	胎土	重量 (g)	備考
第6図	1	SK004	早期後葉・野島	SK003-1SK004-1-7-9-13-15-16-20-21-23-27-29	r	良	黒濁～暗褐色	繊維少・白やや多	(1,600.0)	
	2	SK004	早期後葉・条痕文系	SK004-1-3-4-6-8-10-17-19	r	良	暗濁～暗赤褐色	繊維少・白やや多・砂少	(1,500.0)	外面スス付着。
	3	SK004	早期後葉・野島	SK004-11-12-25-26	r	良	暗濁～暗赤褐色	繊維少・白やや多	(412.3)	
第7図	4	SK004	早期後葉・条痕文系	SK004-7-15・24	m	良	明濁～褐色	繊維少・白・砂	(348.7)	a・bあり。内面炭化物付着。
	5	SK004	早期後葉・条痕文系	SK004-14	m	良	橙～明褐色	繊維少・白やや多・砂	(67.42)	
	6	SK004	早期後葉・条痕文系	SK004-1	m	良	褐色	繊維少・白やや多・砂少	21.9	
	7	SK003	早期後葉・条痕文系	SK003-3	m	良	暗赤褐色	繊維少・白	39.0	内面炭化物付着。
	8	南7T	早期後葉・野島	南7T-1	r	良	暗褐色	繊維・白	62.1	
	9	南7T	早期後葉・条痕文系	南7T-4	r	やや良	黒褐色	繊維少・白やや多	37.9	
	10	東2T	早期後葉・条痕文系	東2T-1	r	良	にぶい褐色	繊維少・砂	6.29	補修孔あり。

※部位の記号は、rが口縁部、mが胴部を意味する。

※色調は外面の色調である。

※胎土の記号は、白が白色胎土、砂が砂粒、赤が赤褐色胎土、黒が黒色胎土、(大)は大粒を意味する。

※重量欄の括弧内の数値は、補修孔の重量である。

第3章 古墳時代以降

第1節 遺構（第8図）

時代順に遺構・遺物について記すことにする。

SD002

東区2トレンチにおいて検出された。20cm～25cmの表土（畑耕作土）、30cmの盛土、20cmの房総のむら造成直前表土層の下からの掘り込みが北北西から南南東方向に確認された。暗褐色土層（D）からハードローム層のⅣ・Ⅴ層まで達する上幅3.7m・下幅1.2m・深さ70cmの溝で、ローム層レベル以下は断面箱状に掘り込まれるが、D層との境は明瞭ではなく、緩やかな傾斜を持つ。

覆土は径2mm～3mmのローム粒や径2cm～3cmの斑状にまとまる暗褐色土粒を少量含み、造成によるためかしまりが良い一様な黒色土層で分層不可能であった。平面的には、若干西側を中心に弧を描くがほぼ直線状であり、古墳のマウンドも確認できないこと、南区で確認された旧表土や古墳時代整穴住居覆土に近似し、条痕文土器小片が出土したこと等から、中・近世において掘削された溝の自然埋没と推測される。

SD001

北区5トレンチにおいて検出された溝と土坑である。5cm～35cmの表土、1m程の盛土、20cm～30cmの「房総のむら」造成直前表土（C）下から黒褐色土・黒色粘土質土を主体とする斜面の自然堆積層に掘り込まれた、東西方向の上幅1.3m・下幅60cm・深さ70cmの溝である。上部は崩落のためか傾斜しているため、深さ50cm部分が断面箱状となる。覆土はSD002の様な旧表土に近い土質ではなく、周囲の自然堆積層の崩落による自然埋没と推測され、C層中から近世土器が出土したこと等から、SD002より新しい中・近世の溝と推測される。

SK001

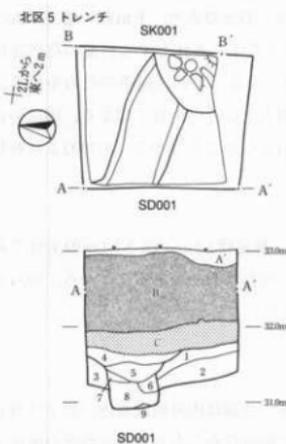
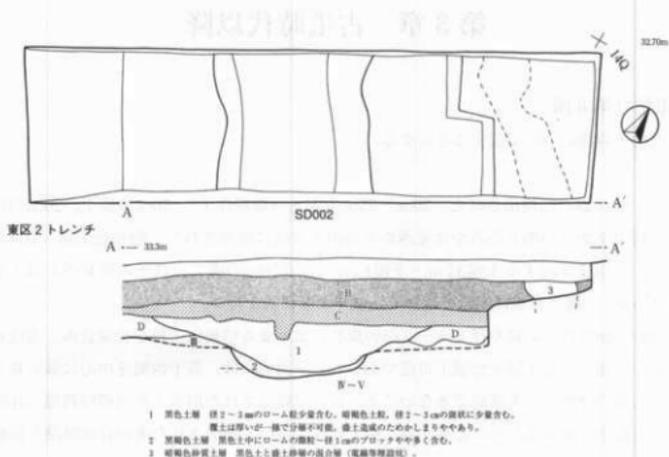
北区5トレンチの東側でSD001を切る様に掘り込まれた、推定径1.2m・深さ1.1mの土坑である。覆土はローム粒を多く含む黒褐色土である。SD001上に掘られ、底部は凹凸があることから、何らかの区画を意味したSD001に関連した植栽痕の可能性が高いと推測される。

第2節 遺物（第8図）

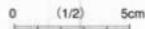
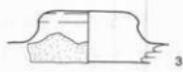
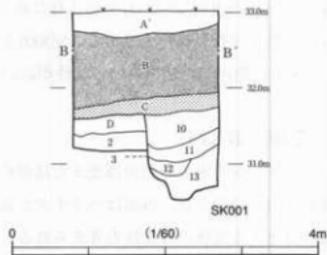
1は、北6トレンチ出土の須恵器または壺の小片である。色調は内外面灰黄色、胎土は長石・砂粒を含み、整形は内面に叩き目、外面はヘラナデが施される。古墳時代から奈良・平安時代の所産で、或いは83号古墳に関連する遺物の可能性も考えられる。

2は、南区7トレンチ出土の土師器杯小片である。色調は外面灰黄褐色、内面橙色である。ロクロ成形で外面に油煙が付着することから、奈良・平安時代の所産と考えられる。

3は、北区5トレンチの旧表土中から出土した瓦質容器の蓋のつまみ部分である。つまみ部分は径4.4cm、色調は内外面・胎土とも暗灰色～にぶい褐色、胎土は径1mm～2mmの石英・長石粒や雲母片を含み、土師器・須恵器より硬質で重量があり、整形はヘラナデである。容器は壺が推測され、雲母片を含むこと等から近世常陸方面産のものと考えられる。



- 1 黒褐色土層 植物の根や元とする赤褐色粒や多く含む。しまりあり。
 - 2 黒褐色粘土質土層 しまり・粘性あり。
 - 3 黒色粘土質土層 しまり・粘性あり。
 - 4 黒褐色土層 赤褐色粒・径2mmのローム粒少量含む。
 - 5 黒褐色土層 径2~10mmのローム粒少量含む。
 - 6 黒褐色土層 5層と同様だが、やや赤褐色粒多し。
 - 7 黒色粘土質土層 3層に近似的。3層の連続層の。
 - 8 暗褐色土層 黒色土及び黒色粘土中に径3~5mmのローム粒少量含む。
 - 9 暗褐色土層 8層と同様だが、ローム粒多く含む。
 - 10 暗褐色土層 径3~5mmのローム粒や中多く含む。
 - 11 暗褐色土層 10層と同様だが、ローム粒や中多く細かい。
 - 12 暗褐色土層 10層と同様だが、ローム粒や中多く細かい。
 - 13 暗褐色土層 黒色土及び黒色粘土層中にロームの隙間に径1cmのブロッコ少量含む。しまり・粘性共に強い。
- (1~3:鉄線の自然腐蝕, 4~9:SD001, 10~13:SK001)



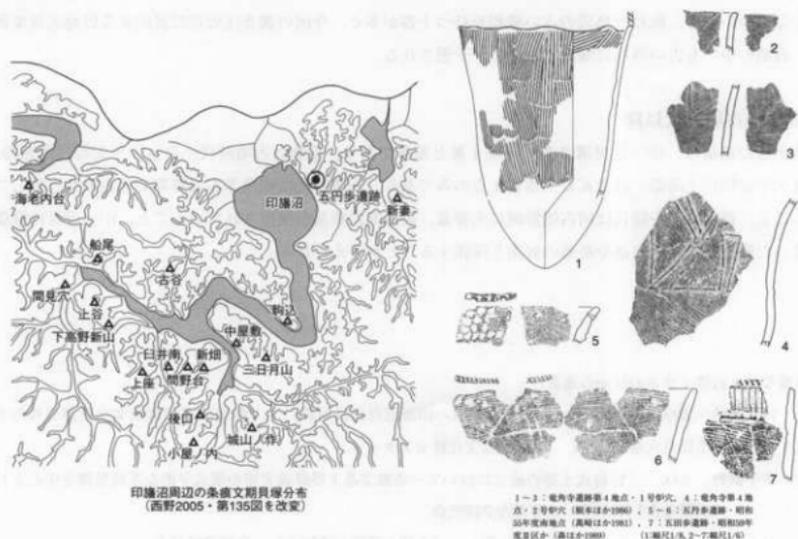
第8図 古墳時代以降遺構・遺物

4章 まとめ

第1節 縄文時代

今回の調査では、縄文時代早期後葉の遺構として炉穴4基・土坑1基を検出した。断片的ではあるが、この地点周辺に広がる早期後葉集落の一部を検出したと評価できる。出土した土器で細別型式が確定できるのは野鳥式のみで、この集落が早期後葉の中でも野鳥式期に関連する集落であることを窺わせる。

第1章で触れたように、今回の調査区付近では早期後葉の遺構・遺物が検出されている。以下の記述では位置図として第2図を参照し、文献は第1章末の注に従う。今回調査区の南側は上下水道管理設幅のみではあるが、竜角寺遺跡として調査された²⁾。SK003・004炉穴の南側付近に接する第3地点で、炉穴が11基検出されている。炉穴出土土器は小片のみで細別時期は確定できないが、早期後葉・条痕文期であることは間違いない。また「11号土坑」は、規模・形態から堅穴住居跡の一部である可能性が指摘されている。住居出土遺物はないものの、調査区内出土土器のほぼ全てが早期後葉で、該期の住居跡である可能性は高い。また、15号炉穴覆土中では、詳細が不明なものの貝層が検出されている。第3地点の南東に当たる第4地点では、炉穴が4基検出され第9図1～4の土器が出土した。房総のむら建設に伴う調査では、竜角寺第4地点の北側に接する「Ⅲ区」から第9図7の土器が出土した可能性が高い³⁾。龍角寺古墳群確認調査では、五丹歩遺跡（南地点）とされた範囲で第9図5・6の土器が出土した⁴⁾。第9図1～7の土器はいずれも野鳥式か、概ね時期的に近接する土器であろう。今回の調査区付近では、早期後葉の土器としてこれ以外に細別型式が確定しうる土器は出土しておらず、野鳥式の分布が濃いことは明らかである。



第9図 周辺の貝塚と隣接地出土土器

今回調査区を含めた周辺の調査成果をまとめると、以下となる。

- ・五丹歩遺跡の今回の調査区周辺には、早期後葉・野鳥式期の集落が展開している可能性が高い。
- ・この集落では、今回の調査を含め炉穴が約20基検出されており、堅穴住居跡を伴う可能性が高い。
- ・集落内には小規模な貝層が存在する。

集落の範囲については、今回の調査区付近から印旛沼に向かう支谷の存在する南東側に展開することが予想される。それは、龍角寺古墳群確認調査²¹や成田安食線の調査⁴¹により、五丹歩遺跡の北方で早期後葉の痕跡がまったく検出されなかったことから裏付けられる。集落としては炉穴と堅穴住居がセットで存在する集落である可能性が高い。これまで検出された炉穴の数も調査範囲を考慮すれば多く、今後機会があれば、より多くの当該期遺構を検出しようの可能性があるだろう。また、貝層の存在はこれまでほとんど注意されていなかった。早期後葉の「印旛沼周辺貝塚群」の立地は、第9図左のように印旛沼低地の谷底にまとまっていることが明らかで⁴²、五丹歩遺跡の立地は特異と言える。これら早期後葉「印旛沼周辺貝塚群」の多くが、早期後葉の中でも縄ヶ島台式期以降が主となる思われ、五丹歩遺跡が野鳥式期主体であるとすれば、その時期的な差異がこうした立地に反映している可能性もあろう。

土器については、SK004から野鳥式の組成が窺える良好な遺構出土資料が得られた。第6図1は、狭い口縁部文様帯に縦短沈線を巡らす土器で、第9図7の隆線による文様意匠が沈線に置換されたものと考えられる。第9図7は野鳥式の古い様相を示す典型例の一つであろう。第6図3は口縁部文様帯に鋸歯状沈線を施し、一部に短沈線を充填するものである。鋸歯状沈線も野鳥式の古い要素の一つとして組成するようである⁴³。野鳥式の細分についてはいくつかの見解があるが、概ね前後型式との要素の連続性から変遷が仮定される⁴⁴。SK004出土土器については、縄ヶ島台式への移行を窺わせる要素を持たない、野鳥式の中でも古い様相を持つ土器群と位置付けられ、遺構伴出事例として重要であろう。第9図に示した周辺出土土器についても、概ね野鳥式の古い様相を持つ土器が多く、今回の調査区周辺に展開する野鳥式期集落が、該期の中でも古い時期に傾斜することが予想される。

第2節 古墳時代以降

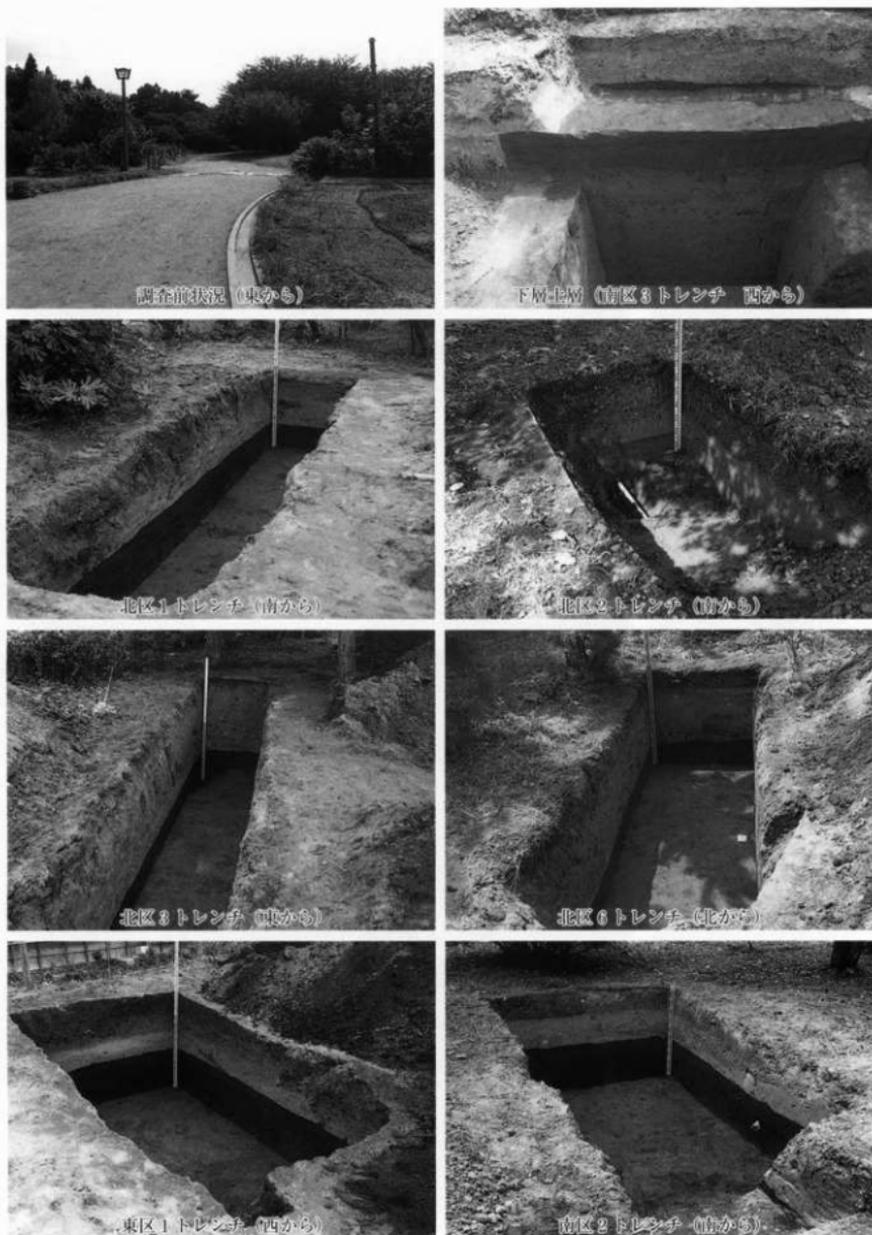
検出した遺構は、中・近世溝2条・土坑1基と希薄であり、遺物は古墳時代～奈良・平安時代須恵器、奈良・平安時代土師器、近世瓦質土器各1点のみである。古墳時代は龍角寺古墳群第83号古墳が近接していること、奈良・平安時代は同古墳群域に火葬墓、周縁部に集落が検出されていること、中・近世は隆盛を誇った龍角寺に伴う集落や耕地の展開と関係することが考えられる。

注(番号は2頁第1章末の注から連番)

- 11 西野雅人 2005 「第2節 縄文早期後葉の印旛沼周辺貝塚群」 【船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4-八千代市間見穴遺跡(2)-】 船橋市文化財センター
- 12 金子直行 2000 「野鳥式土器の成立について-一条痕文系土器群成立期の型式学的な系統整理を中心として-」 【土曜考古】第24号 土曜考古学研究会
- 13 井上 賢 1997 「野鳥式土器二細分論」 【人間・遺跡・遺物3】 発掘者談話会



五丹歩遺跡周辺航空写真 (約1/12,500)



各トレンチ調査状況 1



各トレンチ調査状況 2





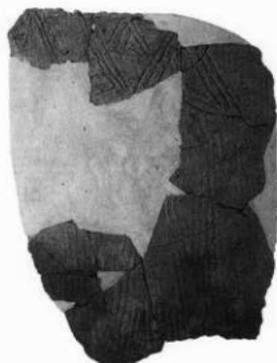
SD002 (東区2トレンチ、西から)



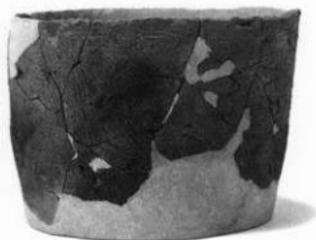
SD001 (北区5トレンチ、東から)



第6図1



第6図3



第6図2



第7図11



第7図4 a



4 b



5



6



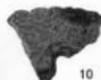
7



8



9



10



第8図1



2



3

報 告 書 抄 録

ふりがな	さかえまちごたんばいせき							
書名	栄町五丹歩遺跡							
副書名	千葉県立房総のむらにおける江戸時代風景の再現事業埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第576集							
編著者名	井上哲朗・大内千年							
編集機関	財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦2007年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
五丹歩	いんげんぼ 印旛郡栄町 電角寺1028-1 ほか	12329	003	35度 49分 9秒	140度 16分 30秒	20060801～ 20060821	1,214	千葉県立房総のむらにおける江戸時代風景の再現事業に伴う埋蔵文化財調査
				日本測地系による				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
五丹歩	集落跡	縄文時代	炉穴 2基 土坑 1基	縄文土器（早期後葉）、 石器		炉穴は出土土器から、早期後葉・野鳥式期に位置付けられる。		
		古墳時代以降	土坑 1基 溝 2条	土師器、須恵器、 中・近世土器				

千葉県教育振興財団調査報告第576集

栄町五丹歩遺跡

—千葉県立房総のむらにおける江戸時代風景の再現事業埋蔵文化財調査報告書—

平成19年3月23日発行

編 集	財団法人	千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	千 葉 県	教 育 委 員 会 千葉県中央区市場町1番地の1
	財団法人	千葉県教育振興財団 千葉県四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株 式 会 社	富 士 印 刷 千葉県稲毛区轟町3-6-18
